

In order to promote the creation of an attractive Osaka, public and private spheres must link up and work together. The CITÉ Salon is an organization created as a forum for such collaboration. It was set up in January 1992 as membership organization with the slogan "Vibrant and Attractive Town Building towards a New Era".



### Leader's Interview

株式会社竹中工務店 取締役執行役員副社長

難波 正人 氏

「グローバルスタンダード」  
「ピクチャレスク」をキーワードに  
新しいまちづくりに挑む

### Symposium Report

第14回CITÉまちづくりシンポジウム

### Event Topics

ソトから見た大阪研究会／さろんトーク／大阪都市格研究会  
大阪食文化研究会／CITÉトークセッションなど

### Members Voice

新入会・大阪市高速電気軌道株式会社

CITÉさろん創立30周年記念プロジェクトメッセージ



## 「グローバルスタンダード」 「ピクチャレスク」をキーワードに 新しいまちづくりに挑む

慶長10(1610)年創業という長い歴史を誇り、近年は“大阪の顔”となるランドマーク的かつウォーカブルな建築物を数多く世に送りだしてきた株式会社竹中工務店。今回のリーダーズ・インタビューは、大阪ビジネスパークやハービス大阪、ハービスエント、グランフロント大阪などの開発を担った難波正人様に、これからの大坂・関西がめざすべき方向性などをお伺いしました。

### 難波 正人 氏 株式会社竹中工務店 取締役執行役員副社長

Mr. Masato Namba

生年月日 1950年3月25日

出身地 兵庫県神戸市

1973年3月 京都大学 工学部建築第一学科 卒業

1973年4月 株式会社竹中工務店入社

2003年3月 同社 取締役

2019年3月 同社 取締役執行役員副社長 兼 夢洲開発本部長  
現在に至る

- 主な担当プロジェクト  
OPBホテルニューオータニ、志摩スペイン村、京セラドーム大阪、ヒルトン大阪、ハービス大阪、ヒルトンプラザウェスト、ハービスエント、ほたるまち、グランフロント大阪、あべのハルカス、フェスティバルタワー（イースト、ウエスト）、大阪梅田ツインタワーズ、サウス、うめきた2期など
- その他社外役職  
・関西経済連合会 評議員、都市・観光・文化委員会 副委員長  
・関西経済同友会 幹事、関西広域インフラ委員会 委員長
- 著書  
・「ホテル開発の21世紀戦略」日本能率協会 1991年（竹中工務店編）  
・「米国ホテル新潮流に学ぶ」日経BP社 1990年（共著）  
・「ホテルデベロップメントの新視点（ホテル業態開発の現状と将来像）」総合ユニコム株式会社 1992年（共著）  
・「都市ホテルのすべて」株式会社柴田書店 1993年（共著）  
・「タイプ別ホテル開発運営実務計画資料集」  
・「サービスマネジメント概論」株式会社学文社 2006年（共著）

### ◎建築で、世界水準の魅力的なまちをつくりたいと考えた学生時代

**漆野**: まず最初に、難波副社長が建築をめざされきっかけや入社された動機、入社当時のどのような社員さんだったのか？ そういうことをお伺いできれば思うのですけれども、いかがでしょうか。

**難波**: 漠然としていましたが、建築に興味があって、京都大学建築学科に進みました。上田篤先生のゼミに入ったのですが、卒業前に、学校から費用の半分を出してもらって、イギリスのニュータウンのフィールド調査に行かせていただきました。折角行くのだからと知人を頼って、まずアメリカから入って、サンフランシスコ、ヒューストン、ニューヨークに立ち寄ってからイギリスに入り、ondon、マンチェスター周辺、ニューキャッスル、グラスゴー周辺などを回りました。2か月ほどの調査の中で感じたのは「欧米に比べて、日本のまちはあまり綺麗ではない」ということでした。戦後30年ほどの昭和48年当時は、まだまだ日本のまちは綺麗とは思えなかったのです。そこで、考えたのが「単体の建築もさることながら、日本で綺麗なまちづくりがしてみたい」ということ。これをきっかけに竹中工務店に入社しました。それから幾星霜、今、弊社は、まちづくり総合エンジニアリング企業を標榜しています。

### ◎調査力を礎に、道は建築から

#### 開発へと広がっていく

**難波**: 入社試験では、「竹中工務店の特色である設計施工一貫ということから、まず設計部を経験したい。そして、設計部で基礎力を付けた上で開発計画本部に行かせてほしい」と申し上げたのを憶えています。

入社してみると、1年間は見習い期間で、千里にあった寮に入って設計や見積もり、施工などの基礎を学びました。その後、東京の設計部に本配属になりました。徒弟制度のような厳しいところでしたが、これが大きな糧になったと、今では思っています。その後、たまたま大阪に戻るチャンスがあって、開発業務に携わるようになりました。その後は、役員になるまで開発一筋で進んできました。

### ◎開発者人生において

#### エボックメイキングとなった著書

**井端**: 今回、頂戴した難波副社長のプロフィールを見せていただく中、多数の著作があることを知り、『ホテル開発の21世紀戦略』を拝読させていただきました。まちづくりの要所となるホテルの市場が大きく変わることが、読み進めるうちに、「実際に見てみる」「まちづくりのためにそこまでするか」というほど徹底的に調査をする」といった難波副社長のお仕事の姿勢が垣間見えてきました。また「ニーズの最先端を追いかけているだけ

では、大きな成功は望めない。ニーズのその先にあるもの、そしてその裏側にある考えを知ることこそが最重要である。これを我々は市場創造型マーケティングと呼んでいる」との記載を読んだときには、目から鱗が何枚も落ちてしまいました（笑）。

**難波**: 私にとって、あの著書はひとつのエボックメイキングでした。部門内の数名が、それぞれ分担して色んな分野…商業や住宅やホテルを深く研究しようということで、私はホテルを担当することになりました。

調べていく中で、かつては日本にはシティホテルとビジネスホテルしかなく、日本にある外資系ホテルもヒルトンとホリディ・インくらいでした。海外の書籍など資料を見ると、アメリカでは多くの市場創造型のホテルが作られており、ヨーロッパには伝統的なラグジュアリーホテルがあったり、多様なんです。日本で高級ホテルというと、ニューオータニ、オーベル、帝国、ロイヤル、いずれも素晴らしいのですが、大型で宴会場と料飲施設がある、そういうホテルばかりですよね。本当に富裕層が泊まるホテルは、日本にないよう見えました。そういうことを分析して、今後の日本のホテルのあり方を書籍にまとめたんです。かなりホテル業界の変革にチャレンジできたのではないかと感じています。

また、著書を通じて弊社の動きを内外に伝えるとともに、個人的にはさまざまな人のつながりをつくってくれて、さらには他の書籍にも繋がっているところがありますね。

### ◎中之島地区をウォーカブルシティの

#### 手本にしていきたい

**漆野**: 関西のさまざまな開発…中之島や御堂筋沿線、OPB…数多くのまちづくりプロジェクトに携わってこられたと思いますが、大阪のどこを見ても竹中工務店のお名前をよく見かけて、私自身は、大阪のまちをすべてつくってこられたのではないか、と感じ

ているほどです（笑）。そんな中、私はよく中之島地区でお散歩を楽しんでいるのですが、東の端から西の端まで歩くと、エリアごとに感じるカラーが違います。エリア毎に面白い特徴があるようですね。このようなアイデンティティづくりを考えた上での中之島地区について、お話を伺いたいと思います。

**難波**: かつて中之島地区は、よくパリのシテ島を引き合いに語っていました。やや殺風景な中之島地区は、シテ島を見習うべきという意味でした。そんな中、弊社は、関連のコンサル会社を通じて中之島西部地区のまちづくりもさまざまな形で提案していました。でも、なかなか遅々として進まないまま今日を迎えています。そんな中、成長を感じるところもあって、例えば、ほたるまちは弊社で考案して、水辺まで下がって行けるような親水仕様にしています。また、堤防の上の緑化なども進められています。さらに、これは、私の勝手なイメージなのですが、次に行う5丁目、ロイヤルホテルさんがあるエリアなどでは、街区の中央辺りの地盤が低いので、周りの護岸と同じ高さに人工地盤をつくって、その下を車が走るようになつたらいいな、と思います。このような開発を進めていけば、地域のアイデンティティを高めていくのではないか、と期待しているところです。

緑のプロムナードがあって、中に都市があって、車と人が共存して界隈をつくっていく…最近の流行でいうとウォーカブルシティの一環として、そこに自転車も車と関係なく走れる…そんなまちを長い時間かけて、つくっていければいいなと思ったりしています。

### ◎西梅田でのグローバルスタンダード&ピクチャレスクなまちづくり

**漆野**: これまでご自分が携わってこられた数多くのプロジェクトの中で、特に印象に



残っている案件をお伺いしたいと思います。併せて若手のみなさんに教訓となるようなこともあれば、お伺いしたいと思います。

**難波**: それぞれのプロジェクトに、それぞれの時点での思い入れがあります。OBP、スペイン村、ほたるまち、うめきた、フェスティバルタワー、あべのハルカス、どれも思い出深いプロジェクトですが、特に、自分自身が、全体的にも実質的にも、さまざまなことを考えて、さまざまな形で動いて、計画をつくった、という意味においては、阪神電気鉄道さんとご一緒に「西梅田のプロジェクト」を挙げます。ホテル調査以来、ぜひ日本に進出してほしいと考えていたリツ・カールトンさんと提携して、「グローバルスタンダードなまちづくり」「ピクチャレスクなまちづくり」をコンセプトにして進めました。海外の企業との提携はいかがなものか、という意見もありましたけれど、阪神さんと我々は海外視察もして、リツ・カールトンさんの魅力を十二分に理解していました。我々が日本人6人ほどで当時アトランタにあったリツ・カールトンさんの本社に視察に行った際、ホテルのロビーに入ってしばらくすると坂本九の『上を向いて歩こう』のピアノのメロディが流れてきて、とても感激しました。同社には従業員の行動指針(クレド)として“紳士・淑女が紳士・淑女をもてなす館”というのがあるんだそうです。「あなた方従業員も紳士・淑女なんですよ、そのつもりでお客さんに接してください」というメッセージなのです。こんな感銘を受ける話があって、阪神さんも信頼されて、プロジェクトは、1期のハービス大阪、2期のハービスエントという形で実現しました。特にハービスエントには劇団四季さんにも入っていただいて、文化的にも西梅田を高める契機になったのではないか、と考

えています。また、2期のハービスエントでは、敷地整序型区画整理事業という日本ではじめての制度を導入して、お隣のヒルトンプラザウエストとスーパーブロック的な計画とすることができます。

歳を重ねていったり、役職が上がっていける間に与する比率が減り、みなさんがやっている仕事に対して意見を言うだけのことが多くなります。実際に自分自身でやって面白かったのは、この案件だったと思っています。

#### ◎これからの大坂・関西の

キーワードは東西軸と舟運

**井端**: 今、関西の多くの方が期待を寄せていているのは、大阪・関西万博とその後に続くMICE・IRですが、これらについての役割や関西のまちづくりへのインパクト、効果などについてのご意見をお伺いできたらと思います。

**難波**: 夢洲がやっと脚光を浴びてきました。まだ成功はしていませんが万博が決まり、MICE・IRも控えている…。夢洲は相当なインパクトを持つエリアになります。そうなるとJRさんも近鉄さんも京阪さんも何らかの形で夢洲に連絡してこられるでしょう。

今まで大阪は御堂筋、堺筋、四ツ橋筋など南北軸が発展してきましたが、これからは東西軸も大阪の要になってくると考えています。もう一つ、オーバーツーリズムと観光の集客格差の解消も大切な要素となって来るのではないでしょうか。これらの問題を解決する方法として、西日本と関西を舟運で結ぶことも大事だと思います。瀬戸内芸術祭は有名ですが、最近では東京建物さんがしまなみ海道の入口にある生口島というところに、アマン創業者による新しい旅館をこの3月にオープンされたようです。他にも我々のところには色々と情報が入って来ています。



島を買って、そこをリゾート拠点にしたい、とか、島と本土にそれぞれラグジュアリー・ホテルをつくり、それを船で結びつけたいとか…そうすると海外の人たちは間違いなく来るんだ、と、ホテルチェーンのトップは言うんですね。そういった瀬戸内に対する観光需要、認知が高まっている。私も関西経済同友会で、舟運の委員会活動を新年度から始めることがあります。万博の頃にインバウンドが戻ってくると想定して、今このような展開をしていくと、2030年、2040年といった将来に、大阪がハブになって西日本に観光が大きく広がっていくと思っています。

#### ◎「世界水準の魅力的なまちづくり」のための具体的な都市政策が求められている

**漆野**: 今、コロナ禍ということで、観光については大変厳しい状態が関西でも、日本全体でも起きていると思いますが、アフター・コロナの施策について、どんなお考えを持っているいらっしゃるのか。それとこれからの関西・大阪にとって取り組むべき課題についてお伺いしたいと思います。

**難波**: 個々の会社としては、コロナ禍の対策はいろいろ必要とは思うんですが、将来、間違いなく右肩上がりにインバウンドが戻ってくると考えています。それに対する仕掛けづくりというかインフラ整備をいろんな形でやっていく必要があると。それを実施したら舟運にもつながってくると思うんですが。近くにいいところがあるので、みんな何を感じていなかったのが、外国の人に言われてはじめて気がつく…こういうことって、結構あると思うんですね。そういうものをきっちり発掘して、アピールしていくことが大切だと思います。

あと、話がちょっと変わりますが、1980年代後半でしたけれども、近鉄さんとスペイン村を計画していた頃、スペインの観光政策のクオリティの高さに驚かされました。ス

ペイン大使館に行くと、各都市の観光パンフレットがきちんと出来上がっているんです。近鉄のトップの方を2週間ほど、スペインをご案内したんですが、そのパンフレットからテキストを取って、冊子にまとめて渡したら、「よく、こんなに調べられましたね！」とほめられました。パンフレットは、全てスペイン政府が用意してくれた日本語のもので、食べる店はもちろん、特産物や観光施設などと地図が載っている3つ折りほどの簡単なものが、スペイン全都市の分があって、本当に参考になりました。これを自分でゼロからまとめようと思ったら、たいへんな労力だったと。このような観光政策において、まだまだ日本は遅れているように感じます。

今、日本にやって来る外国の方は、ネットで簡単に情報を得られるが、当時の情報収集には、たいへんな労力が必要でした。観光政策のサポートというのは、先ほどの話につながりますが、これからのことを考えると、ソフト面でのデータベースの整備がとても大事なことかなと思っています。

#### ◎まちの変容が語る都市政策の重要性

**井端**: 私たちCITÉさんではワークショップなどで、さまざまなテーマでの調査・研究をしています。このような活動の中で、大阪の価値向上のための取り組みが大切だと考えております。これまでさまざまなプロジェクトを展開してこられたご経験からご意見を聞かせていただけますか。

**難波**: 勤続25年目の休暇で2週間もらえるんですが、そこでオーストラリアに13日間、家族を連れて旅行してきました。最初に入ったのがメルボルン。日本の夏に行つたので、あちらは冬というのもありました。メルボルンには、どこか暗いイメージを受けました。シドニーなど、他の都市には明るい印象があったのですが。

ところが、3年前のGWに行ったメルボルン



は様変わりしていました。シドニーに負けないような、アクティビティの高いまちになっていて、「ウォーカブルシティ」とメルボルンの人たちも呼んでいました。

このエピソードが教えてくれたのが、都市政策の重要性です。都市力のなかで、大阪も中之島やうめきたなども含め、各地区的都市開発をさまざまな形で結んでいく、その中で、“歩いて行ける”ウォーカブルシティをめざして、その途中にピクチャレスクなまちをつないでいく。そういった都市政策が求められているのではないかと思うのです。

訪れる人、住む人から「綺麗なまちだな」と感じてもらえるような…個人的な感覚もあって「綺麗なまち」の定義づけは難しいと思いますが…例えば、歩きやすい、ウォーカブル

というのは、間違いなくいいことですしこういった政策を使って、まちをうまく変えていくことが大事なのではないかと思っています。CITÉさんでも、既に取り上げておられるテーマかもしれません、我々も今後、取り組みたいと思っています。

#### ◎「あそこに行ったら面白いよね」と言ってもらえる仕掛けづくり

**漆野**: 最後に、今後、大阪・関西がめざすべき方向性についてのご意見をお伺いできればと思うのですが、いかがでしょうか。

**難波**: みなさんがいつも言われていることですが、やはり、大阪・関西が東京と同じようなまちをめざすというのは難しいし、意味がないと思います。大阪で強い産業がいくつかありますが、それはそれで伸ばして、うめきたの1期、2期でもチャレンジしていくように、若者が集まりやすいまちづくり、若い人たちが行きたいと思えるような仕掛けをつくることが、とても重要になってく



インタビュー  
**井端 宏征 氏**  
ダイキン工業株式会社・CITÉさん広報委員会委員  
**漆野茉莉子 氏**  
株式会社ザイマックス関西・CITÉさんWSメンバー  
取材場所 株式会社竹中工務店 応接室  
取材日 2021年2月17日(水)9:00~10:45  
※三者での撮影は、新型コロナウイルス感染拡大に  
関して、十分に対応した上で、マスクを外して  
実施しています。ご了承ください。





# 第14回 CITÉまちづくりシンポジウム アフターコロナの大阪が目指すべきもの ～新しい生活様式とまちづくり～ [オンライン開催]

毎回、斬新な視点と独自のアイデアを盛り込んで、大阪のまちづくりに新鮮な提案を続いているCITÉまちづくりシンポジウム。第14回は、コロナ時代を迎え、初のオンラインでの開催に。各分野の専門家をお招きし、新型コロナウィルスのもたらした社会や都市の変化を受けて、アフターコロナ時代における、大阪が目指す都市のあり方はどういったものなのか、今後のまちづくりとして考えていくべきものはなにかについて、熱い議論が交わされました。

## —プログラム—

- ◇開会挨拶(15:00) 松本 利典氏(CITÉさるん副会長)
- ◇基調講演(15:05~15:45)  
「アフターコロナのまちづくりについて」 講師:光安 達也 氏(国土交通省 都市局 まちづくり推進課長)
- ◇パネルディスカッション(16:55~17:45)  
「アフターコロナにおける大阪が目指すべき都市づくりの方向性とは」  
コーディネーター:武田 重昭氏(大阪府立大学大学院 准教授)  
パネリスト:吹田 良平氏(MEZZANINE編集長) 牧村 和彦氏(計量計画研究所理事長兼研究本部企画戦略部長)  
上溝 憲郎氏(大阪市 都市計画局 開発調整部長) 光安 達也氏(国土交通省 都市局 まちづくり推進課長)
- ◇閉会挨拶:高宮 紀子氏(CITÉさるん広報委員会委員長)

日時／2021年2月4日(月) 15:00~17:45 形式／オンライン開催 主催／CITÉさるん

### 基調講演

#### アフターコロナの まちづくりについて

講師:光安 達也 氏

国土交通省 都市局 まちづくり推進課長

光安さんからは、国土交通省におけるコンパクト・プラス・ネットワークの推進や都市の国際競争力の強化、「居心地が良く歩きたくなる」まちなかづくりなどの都市の集積や機能、賑わいを高める取組をご紹介いただくとともに、今回のコロナ危機による今後の都市のあり方や影響、それらを踏まえた今後のまちづくりの方向性について、講演いただきました。

#### 新型コロナ危機を契機としての社会や生活意識の変化

コロナ危機は、人を集めることで力を発揮するというこれまでの都市のあり方、都市政策のあり方に対して、大きな疑問を投げかけました。

##### ① 働き方の変化(テレワークの利用率等)

一番大きな変化はテレワークの進展。緊急事態宣言発令時に、テレワーク利用者が25%まで上昇し、昨年10月時点でのテレワーク継続意向も7割近くあり、継続の可能性が高いと思われます。

##### ② テレワークの課題

課題として、会社内外いずれでもテレワークではコミュニケーションを取りにくいという回答が4割以上と高く、業務でのディスカッションは約7割がオフィスで行いたいと思っている一方で、資料作成や事務処理などの単純作業は約6割がテレワークでという意向があり、テレワークに馴染む仕事と馴染まない仕事があることが分かります。

##### ③ オフィス空室率の動向と、オフィス面積の変化

テレワークの影響を受けるオフィス空室率は低水準で推移しています。オフィス面積に対する意向は、「面積を変えない」が5割を超える一方で、「拡張したい」が前年より減少、「縮小したい」が増加しています。快適性などを求めて「面積を拡張したい」という企業も一定数あり、今後上昇の予想もあり動向を注視しています。

##### ④ サテライトオフィス/コワーキングスペース

サテライトオフィスの導入状況では、コロナ危機以前に導入していた企業が1/4以上、コロナを機に強化・拡大・導入した企業は合わせて15%あり、多くの企業での導入が進んでいます。特に駅近くでの需要が高くなっています。

##### ⑤ 生活・通勤時間、住まいに対する意識の変化

感染拡大を受け、5割の人が仕事より生活を重視したい、7割以上が家族と過ごす時間が増加したと回答しています。そのうち、8割以上の方が家族との時間を今後も維持したいと回答し、生活意識が変化してきています。

また、テレワーク実施率の高い東京圏の居住者の通勤時間が減少、その約7割が今後も減少を保ちたいと回答しています。コロナ流行前と現在までの住まい選びで重視する点も、「職場に通いやすい」「駅近」等のポイントが下がる一方で、「家族や親せきの住まいとの距離」「病院等の周辺環境」「プライベートの確保」「通信環境」等が以前より重視されています。

##### ⑥ 身近なオープンスペースの重要性の再認識

一昨年度と比較し、公園利用者は平日で約1.9倍、休日で約1.4倍に増加し、密閉空間を避け、オープンな空間である都市公園が利用され、安全な場所としても評価されています。「都市で充実してほしい空間」については、半数近くが公園、広場、テラス等のゆとりある屋外空間の充実を挙げ、身近なオープンスペースのニーズが高まっています。利用形態も多様化し、公園でのフィットネス、オープンスペースへのキッチンカー、店舗前のオープンカフェ等、屋内での活動を屋外で行う事例も増えています。

#### 今後のまちづくりの方向性

##### ① 新型コロナ危機を契機としたまちづくりの方向性と概要

昨夏に、新型コロナ危機の中で都市のあり方の変化、その変化を踏まえた都市政策のあり方について、有識者の意見を基に、具体的な5つの論点を整理しています。

##### 【論点1】都市の今後のあり方と新しい政策の方向性

テレワークの進展、通勤混雑からの解放という経験を経て、多くの方

が以前の状態には戻りたくない感じている一方で、どこでも働ける環境が整い、働く場と居住の場の融合が起こり、働くにも住むにも快適な環境、ゆとりあるスペースへのニーズが高まっています。オンライン化が進むと、リアルの場ならではの価値が求められ、大都市は国際競争力の強化の観点からクリエイティブ人材を惹きつける良質なオフィスの供給と良好な住環境の提供、リアルならではの文化、食を提供できる場として魅力向上が必要になります。

郊外や地方都市では、身の回りの生活圏で充実した暮らしができる居住の場、働く場、憩いの場等、様々な機能を備えた地元生活圏の形成が重要になると想います。

##### 【論点2】都市交通の今後のあり方と新しい政策の方向性

時間価値の重要性が強く認識され、時間をかけて移動し人が集まることが、リスクに見合う新たな価値を生み出さなければ、人は移動しなくなると懸念されるなか、安心して利用できる環境づくりとして、公共交通については混雑のリアルタイム発信による過密の回避、街路空間についても適切な密度を確保する等の考えを取り入れる必要があります。

まち全体としての公共交通のあり方、維持方策を考えた総合的な交通戦略の推進、シェアリングモビリティなど多様な移動手段の確保、自転車が利用しやすい環境整備、時間価値の重要性が認識される中、身の回りの生活の充実の点からは、生活に必要な機能を集積、安全性、快適性、利便性を備えた「駅まち」空間の一体的な整備や、駅前や商店街などまちなか中心のウォーカブルなまちづくりについても職住近接のまちづくりとして、郊外や地方都市の住宅街でも身近な生活エリアの価値を上げる視点として重要です。

##### 【論点3】オープンスペースの今後のあり方と新しい政策の方向性

グリーンインフラの効果の更なる向上が必要であり、魅力的なウォーカブル空間の形成が重要になる中で、緑の持つ効果も考慮してネットワークを形成し、日常生活の中で活用できることが必要になります。緑とオープンスペースを地域のニーズに応じて柔軟に使い、公共空間で柔軟で多様な活用を進めること、それを支える人材育成やノウハウの展開を進めることが必要になると考えています。

##### 【論点4】データ・新技術等を活用したまちづくりの今後のあり方と新しい政策の方向性

コロナ危機の中でデジタル化が急速に進み、フィジタル空間が果たしてきた都市機能の一部がデジタル空間へ移行すると考えられ、デジタル空間とフィジタル空間を一体的に捉える必要も出てきます。過密対策としてデータ活用による密度コントロールのニーズが高まり、非常時におけるデータの利活用に対する議論が生まれつつあります。パーソナルデータの活用も重要となり、市民の理解を得つつ、市民主体のデータや新技術の活用等の取組推進が必要です。

##### 【論点5】複合災害への対応等を踏まえた防災まちづくりの新しい政策の方向性

コロナ危機の状況での被災地は、コロナと自然災害の異なる事態に同時に対応しなければなりません。実際の災害時には避難所運営において感染リスク抑制と避難所を両立させる必要があり、自治体の初動対応にも変化が生じています。避難所の過密を避けるため、公共施設や民間施設等を避難所として活用することも必要です。適切な土地利用規制や誘導等を通じた居住の移転、より安全な宅地形成等を進めることも重要で、人流データや滞在データに基づき、混雑状況を発信し特定の箇所への集中を避ける取組も重要になります。

② デジタル化の急速な進展やニューノーマルに対応した都市政策のあり方検討会  
これらの論点整理を踏まえ、デジタル化の急速な進展やニューノーマルに対応した都市政策のあり方検討会を、昨年10月に設置し、より具体的な実現方策の検討を進めています。ニューノーマルにおいて目指すべきまちづくりの方向性と共に、市民のQOL向上の観点から都市アセスメントの利活用、まちづくりの担い手の検討プロセスや、支援のあり方等も検討しており、年度内の取りまとめを予定しています。



講師 光安 達也 氏

国土交通省 都市局 まちづくり推進課長

1971年福岡県生まれ。東京大学法学院卒業後、平成8年に建設省入省後、国土交通省総合政策局総務課企画官、都市局まちづくり推進課都市開発金融支援室長、名古屋市住宅都市局長を歴任。令和2年より現職。

## パネルディスカッション

アフターコロナにおける  
大阪が目指すべき都市づくりの方向性とは

コーディネーター：武田 重昭氏  
パネラー：吹田 良平氏／牧村 和彦氏  
上溝 憲郎氏／光安 達也氏

## ◎都市を考える3つの問い合わせ

冒頭にコーディネーターの武田先生から、アフターコロナの都市を考える3つの視点が示されました。

1つ目は「都市の本質」として、コロナによって都市の意味はどう変化するのか？これまで市場原理に任せてきた都市の意味がコロナによってどのように変化していくのか、賑わい至上主義を越えて、交流の



価値をどう高めて、欲望だけでなく人々の尊厳を支えるというようなことも含めてどこを目指すべきなのか、その中で大阪の持つ個性をどう発揮するか、本来の都市の魅力はなにか、という点が問われる。

2つ目は「技術と身体」として、ビフォアコロナから、SDGsが叫ばれ、社会・環境・経済がどう健全かという視点も重要である。そのなかで技術の進歩は私たちの身体的な感覚や思考、ひいては生きる目標そのものにどのような変化を与えていくのか、健全なエコシステムをさせるための技術という点についての視点が求められる。

3つ目として「時間の計画」として、不確実な未来に対して、これからどのように時間を計画の中に組み込んでいくのか。環境のみならず、時間のオーバーレイも議論が必要である。シンガポールや、明治神宮の森の事例のように、都市を計画する上で、どのように時間価値を高めるのかという点が挙げられ、以上、3つの視点から意見を伺いたい旨、口火が切られました。

## ◎自己紹介を含めたプレゼンテーション

まず、吹田さんから自身が編集長を務める雑誌「MEZZANINE」を通して、今後の都市のあり様「創造界隈」に関する提言がありました。

都市は雇用機会を生み出し、社会福祉費やインフラ維持費用の原資を生み出す工場。そこに漂う空気とは、安易な「交流」より、何かを創造するために自分の世界に没頭したい自立した者同士が必要に応じて柔軟に交わり相互作用を行う、「連携進化」というムード。

重要なのは、交流の質の違いを認識すること。社会的包摂や相互扶助を醸成させるための社会関係資本を高める交流と、連携進化をもたらす創造資本を高める交流とは、性質を明確に区別する必要がある。地域コミュニティ論やいわゆる「まちづくり」の現場でいわれる「つながり」や「関係人口」と、生産性を高める場、創造界隈で歓迎される「コ・ラーニング

グ」や「共創人口」とは明らかに目指す方向が異なる。創造界隈とは、友人づくりよりも、自分の欲望を優先し一人没頭する者を開かれた、アナーキーでラジカル、わがままなネイバーフッド、との旨を話されました。次に、牧村さんからは、MaaSやスマートシティのような都市とデジタル、あるいは移動をどのように上手く繋いでいくか、そこに人の交流や営みがあって、生きがいなどをどのようにまちで達成していくかに提案したり、実装したり取組んでいる。MaaSが都市を変えるというというテーマで書をまとめている。普段、将来のビジョンづくりで行政の計画にも関わり、MaaSという手段で将来の人の営みがどう変わることにも取り組んでいる。

技術と人がともに進歩していくようなまちを目指していくビジョン、ひとと車が共生する考え方方が求められてくる。今までの「大都市以外は自動車しかない」という移動手段に加えて、もう一つ新しい手段として、新しい移動のサービスを作っていくこと、自家用車中心の社会から多様なモビリティの社会にデジタルの力を使ってパラダイムシフトすることがMaaSの本質で、グリーンリカバリー、都市に惹きつける装置としてのMaaSを使って都市の魅力を結びつけることも必要と話されました。

上溝さんは、ご自身が担当されている大阪城東部地区のまちづくりやなんば駅周辺における空間再編などについて紹介いただきました。大阪市内部でも、コロナ禍を踏まえたまちづくりについて議論しており、まちづくりの方針(案)として、「①新しい生活スタイルに対応した住環境の整備やまちづくりの推進」、「②インフラの充実・有効活用による憩いの場の創出」、「③スマートシティ技術の活用によるまちづくり」の3本の柱が挙がっていると説明されました。

基調講演をされた光安さんからは、都市局として「ウォーカブルから始まりニューノーマルのまちづくりへと進めてきているが、皆さんの考えと大きな方向性は一緒であり、ニューノーマルのまちづくりの検討の中に反映させていきたい旨、お話をありました。

都市の本質として、ひとが集まり活動し、生活し、交流することで付加価値、イノベーションが生まれる、そこは変わらないのではないか、リアルな空間でのコミュニケーションの意義や、時間の計画についても柔軟性や可変性が重要になり、短期的だけでなく長い目で見ることについての提起がありました。

それぞれの話題提供等を踏まえ、新しいイノベーションにつなげるための既存知と既存知のぶつかり合い、アイディアの流動性や交通

のダイナミックな変化を受けたオープンスペースの変革の可能性、イノベーションをさらに引き起こすためにもウォーカブルのまちづくりが都市再生の第2フェーズであるといったことなどに話題が広がりながら、議論を展開しました。

## ◎これからの大阪の都市のあり方への提言

活発な議論の後、パネリストから以下のように、これからの時代の大都市における都市づくりへの提言などをフリップに表現いただきました。

## 大都市には厳しいご時世！でも、この転換期をチャンスに変える

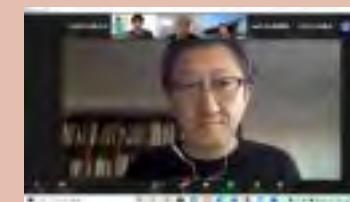
上溝さんは、「大都市には厳しいご時世」だが、コロナによる大きな転換期をチャンスに変えることができるのではないかと語りました。大都市の機能集積の優位性はテレワークの促進等で低下がすることが予想され、放っておくと、都市間競争にも厳しくなるが、時代の流れを捉え、大都市の良さや大阪の強みをしっかりと活かして対応できれば、発展のきっかけにもなるのではないかとのことです。

そのためには、大阪が「住む、働く」場所として選ばれるように、これまでのストックを活かしながら、都市の魅力を高める工夫、努力が必要であり、また空いた空間を伸びしろとして将来に残すことにも効果的で、それをうまく活用するような具体的な対策を考えていきたい、と語られました。

## One Way未完都市 Osaka

牧村さんからは、「One Way未完都市 Osaka」というフレーズとともに、一方通行の道路があり新しいモビリティが最初にできる都市構造である大阪が日本で最初に自動運転ができなければならない、と語られました。また、昔からマルチモーダル・シティになっていたり、歩行者ネットワークも歩行者空間の商店街がネットワーク化されていて、ヨーロッパの人が来てもアメリカ

の人が来ても驚かれるところで、大事なところです。  
また、水陸両用車は走るエンターテインメントであり、将来の自動運



転の絵姿であるとともに、大阪のまちを堪能できる道具が、大阪にはたくさんあるので、ぜひ「One Way未完都市 Osaka」を推進していくと良いと話されました。

## NeighborHEADS

吹田さんからは、「NeighborHEADS（ネイバーヘッズ）」を提唱したいという話がありました。開発を手掛けられているアイディア流動化促進アプリのことで、相談や議論やコラボレーションのために、平気で他人のドアをノックできるまちを実現したい。

つまり、挑戦しやすいまち、挑戦する人に開かれたまち、それが私の定義する創造界隈です。

アイディアを形にするためには、先達の知恵や失敗を共有するのが一番。まちの中でリアルに会って対話する人をつなぐための手段、要はまちの皆でアイディアのバス回しをするための手段が「NeighborHEADS」です。これからいろいろな街に実装していきたいと思っています。

## 融合

光安さんからは、「融合」をキーワードに、コロナ禍を契機として、職住近接などだけでなく、公共空間と民間空間、リアルとサイバー空間などを含め、交流しながら融合していくことが必要になるのではないか、官民の融合や職住の融合、空間の融合、人々の融合等が、これらのまちづくりでは重要なと思う、とお話をされました。

## ◎大阪市民の前向きな意識を都市に反映すること

最後に、コーディネーターの武田先生から、コロナ禍の状況が続く中、社会になんとなく閉塞感が漂っており、私たち自身が私たち自身の暮らしを変えていくモチベーションが求められている。本日のご指摘の中に、前向きな、未来志向で明るい都市のビジョンが見出せたような気がする。大阪の市民の前向きな意識をどのように都市に反映していくのか、それそのものが、大阪の一番の魅力の根源ではないかと、シンポジウムを締めくくられました。



コーディネーター  
**武田 重昭氏**  
大阪府立大学大学院准教授  
1975年生まれ。UR都市機構、兵庫県立人と自然の博物館を経て現職。博士（緑地環境科学）。技術士（建設部門）。登録ランドスケープアーキテクト。専門は緑地計画、ランドスケープ・マネジメント。著書に『小さな空間から都市をプランニングする』（共著・2019年）、『都市を変える水辺アクション』（共著・2015年）など。



パネリスト  
**吹田 良平氏**  
MEZZANINE編集長  
2003年、都市を対象にプレスメイキングとプリントメイキングを行うアーキネティクスを設立。都市開発、商業開発等の構想策定と関連する内容の出版物編集・制作を行う。主な実績に渋谷QFRONT、「日本ショッピングセンター ハンドブック」共著、「グリーンネイバーフッド」自著等がある。2017年より都市をテーマとした新雑誌「MEZZANINE」を刊行。



パネリスト  
**牧村 和彦氏**  
(一財)計量計画研究所理事兼研究本部企画戦略部部長  
1990年、一般社団法人計量計画研究所(IBS)入所。モビリティデザイナー。東京大学博士(工学)。筑波大学客員教授、神戸大学客員教授。都市・交通のシンクタンクに従事し、将来のモビリティビジョンを描くスペシャリストとして活動。内閣官房未来投資会議、官民連携協議会などに参加。経産省スマートモビリティ推進協議会企画運営委員他多数。代表的な著書に『MaaS～モビリティ革命の先にある全産業のゲームチェンジ』(日経BP)、『Beyond MaaS～日本から始まる新モビリティ革命～移動と都市の未来～』(日経BP)、『2005年自動車はこうなる』(共著、自動車技術会)など多数。



パネリスト  
**上溝 憲郎氏**  
大阪市都市計画局開発調整部長  
1994年、大阪市に奉職。2011年～計画調整局企画振興部参事((財)大阪市都市工学情報センター出向)、CITEさんるん事務局を担当。2013年～都市計画局企画振興部うめきた企画担当課長。2016年～港湾局商業推進課室開発調整課長。2019年～都市計画局うめきた整備担当部長。2020年～現職。



パネリスト  
**光安 達也氏**  
国土交通省 都市局 まちづくり推進課長  
1971年福岡県生まれ。東京大学法学部卒業後、平成8年に建設省入省後、国土交通省総合政策局総務課企画官、都市局まちづくり推進課都市開発金融支援室長、名古屋市住宅都市局長を歴任。令和2年より現職。

## 登壇者プロフィール

## まちづくりを考える、体験する、多彩なイベントを開催しています。

### ソトから見た大阪研究会

人と人、人と場をつなぐ  
コミュニケーションの新しい形  
「オンライン宿泊」

「オンライン宿泊」の体験会およびヒアリングを行いました。  
・オンライン宿泊:10月19日(月)、27日(火)  
・ヒアリング:10月28日(水)  
コロナ禍を経て、私たちの暮らしの中に浸透し始めた「オンライン」という選択肢。現地を訪ねたり、対面で直接会話をするコミュニケーションの大切さを実感する中で、オンラインの便利さを活用したコミュニケーションの新しい形を探るため、「オンライン宿泊」という新しいサービスを始められた、和歌山県の那智勝浦町にあるゲストハウス『Why Kumano』さんにお願いし、10月に「オンライン宿泊」の体験会及びヒアリングを行いました。オンラインと真逆の立場にある「宿泊」や「観光」を、オンラインでできたらおもしろいという発想のもと、参加している人たちに能動的な交流を促しながら、ゲストハウスの共有スペースでよくある状況を「仮想ラウンジ」で再現することで、実際に現地に行つた雰囲気を味わえるイベント内容でした。旅のおもしろさである“人との交流”は、オンラインからつながることもできるのだと、これからコミュニケーションや旅の可能性を感じることができました。



「オンライン宿泊」参加者の様子

オンラインとリアルの場を融合する新たな取組み  
「シェア街」

まちをシェアする「シェア街」についてヒアリングを行いました。  
・ヒアリング:2月15日(月)  
緊急事態宣言以降、仕事だけでなくオンライン飲み会やオンラインイベントなど、人とのコミュニケーションの方法としても「オンライン」が浸透してきました。オンラインとリアルの場の融合的な取組として、まちをシェアする「シェア街」に着目し、2月にオンラインヒアリングを行いました。「シェア街」は、両国や御徒町にあるリアルの「きよてん」やオンラインの「きよてん」で、「しごと」をすることで「つうか」をもらい、コミュニティづくりの研究や実践を行うことができるコミュニティです。コミュニティの多様化を目指して発足したこの「シェア街」には、地域・年齢・業種を問わず幅広い価値観の人々が参加しており、リアルの場所に住む「住民」とオンライン上の住民「関係住民」が日々新しい取り組みを試していました。現在はオンラインでの活動がメインとなっているそうですが、住民同士のやり取りはアクティブに行われており、日々「シェア街」をどんなまちにしていきたいなどを考えられているそうで、リアルとオンラインの良いところを融合した、新たなまちづくりの可能性を感じる取り組みでした。



柚木 理雄氏  
株式会社Little Japan  
代表取締役  
シェア街主催

このような活動をおこなっている  
「ソト研」メンバーのご紹介

大阪を「ソトから見る」、大阪の「ソトから学ぶ」ことを通じ、多様な価値観や視点で得た情報や意見をとりまとめ、都市の価値創造や女性の活躍、多様性を活かしたまちづくりのヒントにすることを目的に活動しています。2020年度は、コロナ禍を経て生まれてきた私たちの価値観の変化に着目し「新しい価値観と心地よいコミュニケーションから生まれる、これからまちづくり」の姿を探ることにしています。また、今年度から、2年単位で活動しており、2020年度はヒアリングや視察、2021年度は、参加者をCITÉさろん関係者全体に広げたソト研視点の大きなイベントを行う予定としています。

メンバーはコアメンバーの5名を中心として、2名のオブザーバーやY3-Lab.さんと共に活動しています。今後も、ソト研をどうぞよろしくお願いいたします！

◎これまで・これからのソト研の活動  
詳細についてはコチラ！ぜひご確認ください！



ソトからみた大阪研究会 ホームページ  
<http://sotoken.citesalon.jp/>



### 第2回さろんトーク

2021年2月15日(月)16:30~17:30  
オンライン開催

阪神高速道路株式会社の関本宏様より  
「関西都市圏のみちづくり阪神高速の取り組みー」  
というテーマにてご講演をいただきました。

今年度のさろんトークは「都市交通ネットワーク」をテーマに、第1回の大阪市井上都市交通局長



に続き、第2回は阪神高速道路株式会社代表取締役専務執行員の関本宏様より「関西都市圏のみちづくり阪神高速の取り組みー」というテーマにてご講演を頂きました。

冒頭に、阪神高速の交通量もコロナ禍で減少していること、また現在取り組まれている「道路システムのDX」がキャッシュレス化・タッチレス化を通じてコロナ対策になることが示されました。

講演の主題である道路ネットワークについては、1982年に近畿地区幹線道路連絡協議会が策定した「阪神都市圏主要幹線道路網の計画」に沿った整備が進められてきたこと、大阪湾岸道路西伸部と淀川左岸線が完成すれば、ほぼ40年かけたネットワーク整備が完了するとのお話がありました。

また、昨年開通した大和川線や信濃橋渡り線により実現した交通時間の短縮効果を示され、これらよりも大きな時間短縮効果が、大阪湾岸道路西伸部による3号神戸線の渋滞緩和や淀川左岸線2期・延伸部による大阪都市再生環状道路の完成が、現在の環状線への流入交通量を減らすことで得られるとのご説明がありました。

次にネットワーク整備と並ぶ重点課題であるリニューアルプロジェクトについてお話をありました。

道路に限らず高度成長期に整備された老朽化インフラの更新が日本全体の課題ですが、阪神高速では供用後40年を過ぎると構造物の劣化や損傷が増加する明確な傾向があり、10年後には建設から40年以上



阪神高速道路ネットワーク図

### 大阪都市格研究会

2021年2月17日(水)16:00~18:00  
オンライン開催

「海外からみた大阪の魅力とホットスポット、そして今後の期待」をテーマにオンラインセミナーを開催。

第4期目に入った都市格研究会は、観光を目的としたインバウンド旅客が増加してきた中(現在特殊要因で急減していますが)で、今後のまちづくりにおいてビジネスなど観光客以外の外国人からの視点で大阪の都市格を考えようという主旨で行っています。第2回の研究会は「海外からみた大阪の魅力とホットスポット、そして今後の期待」をテーマに2021年2月17日にオンラインセミナーという形で開催させていただきました。

初めに研究会座長の関西学院大学の角野幸博教授より、今年度の研究成果報告がありました。資料調査やヒアリング調査の結果からみつけた大阪市の魅力や顕在しているホットスポットと今後外国人に注目されそうなスポットを紹介いただきました。

続いて、実際に外から大阪のことをどのように見ているかという視点で、英国からテムズバレー商工会議所ジャパンデスク代表の江口・ペイコン昌子氏、京都から京都R不動産運営・株式会社51Action代表水口貴之氏にリモートでご講演いただきました。英国や京都といった伝統的なまちにおける都市格やホットスポットを紹介いただくとともに、外からみた大阪について大変興味深いお話を聞きすることができました。

最後に「英国や京都からみた大阪の魅力や英國や京都のホットスポット」をテーマに、角野教授、江口氏、水口氏によるパネルディスカッションをしていただきました。ロンドンのドックランズやバタシー発電所の再開発例や京都のまち中の非常に近い距離感のうちに新たな挑戦が起こっているといった議論がありました。

時間や距離の関係で会場とのコミュニケーションが十分とれなかったことが残念でしたが、これまでにないセミナーにチャレンジすることができました。



江口・ペイコン昌子氏  
テムズバレー商工会議所  
ジャパンデスク代表  
水口貴之氏  
株式会社51Action代表

## 2020年度「大阪食文化研究会 THE FINAL」

COVID-19が世界を一変させた2020年度。

なんとなく、ヒト・モノ・カネが集積する「都市は地方よりも格上」という定説が崩壊し、人が密集する都市ほど感染拡大が顕著で、くらし方、働き方、学び方、移動方法、社会経済のしくみに至るまで、あらゆる活動に規制・変容・変革が求められた1年でした。とりわけ食産業界の被害は甚大で、大阪市内の飲食店廃業件数は、約3,500軒(2020年12月末現在)、北新地3,000軒のうち約1,500軒が廃業。約15,000人の従業員が解雇されたそうです。このためCOVID-19をチャンスに変える発想のもと、今この時を、「大阪を変える」「大阪が変わる」好機と捉え、国内初の「グリーンリカバリー」の視点から経済と環境、とくにSDGs、脱炭素、レジリエンス、DXなど、「つくる、売る、食べる、運ぶ、伝える、学ぶ」あらゆる食のシーンにフードテック革命をもたらし、新たな「Food5.0」時代に適合した食文化産業を大阪から創造する。そして都市経済起点型から一次産業主導型の食文化産業圏を「近畿圏・関西圏」に拡張し、圏域マネジメント手法を確立しながら、日本初の食・食文化再生の取組を、ここ食の都・大阪から発進し、オール大阪で実現する、この未来を耕す取組こそが「次代の大坂」を築くことにつながると、この2回の研究会を通じて確信しました。「食」は、「人間のいのち・健康・生きる力を育む」唯一無二の行為であり、日常生活最大の「コミュニケーションツール」です。～いのち輝く未来社会のデザインこそ「食」なり～。ステークホルダーに「地球」が加わるこれらの時代の要請は、「グリーン＆ブルー」です。

### <第1回研究会>

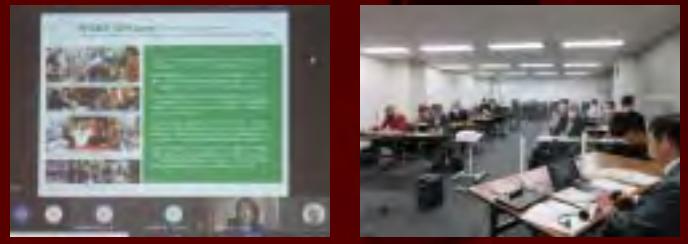
#### 1. プログラム

- 開催日時:2020年12月3日(木) 15時00分～17時00分  
(12月定例幹事会終了後)
- 運営拠点:株式会社KANSOテクノス 4階 大会議室  
(大阪市中央区安土町1-3-5)
- 開催方法:オンライン開催
- テーマ:グリーン・リカバリーの視点から  
大阪・関西の「食文化」をリ・デザインする  
～食を切り口に「戻る日本」を大阪から変える意義と使命を考える～
- 実施内容

- ①開会挨拶・主旨説明/CITÉさろん副会長 上田 徹 氏(5分)
- ②withコロナ・ヒアリング調査結果報告/  
有限会社ハートビートプラン 岸本 しおり 氏(15分)
- ③話題提供(40分)  
■「世界のグリーンリカバリーの本質と食による都市の持続可能な発展」  
株式会社GEN Japan 代表取締役社長 斎藤 由佳子 氏
- 「食の生産地・生産者」の熱い想いを作り手・食べ手に届ける近未来  
流通システムの構築・実践事例  
たべものカンパニー、いきものカンパニー 創業者 菊池 紳 氏
- ④鼎談(50分)  
■テーマ:グリーン・リカバリーの視点から食を切り口に「戻る日本」を  
大阪から変える」意義と使命
- 鼎談者  
・斎藤 由佳子 氏(株式会社GEN Japan 代表取締役社長)  
・菊池 紳 氏(たべものカンパニー、いきものカンパニー創業者)  
・尾藤 環 氏(辻調理師専門学校・辻製菓専門学校 企画部長 産学連携教育推進室長)



- 質疑・応答(10分)
- 次回予告・閉会挨拶/CITÉさろん副会長 上田 徹 氏



斎藤由佳子氏プレゼンテーション

運営拠点の状況

大阪食文化研究会アドバイザー・門上武司氏

オブザーバー大阪市上溝氏(右)・花澤氏(左)

### <第2回研究会>

#### 1. プログラム

- 日時:2021年1月26日(火) 15時00分～17時30分
- 運営拠点:御堂会館 4階 Aホール(大阪市中央区久太郎町4-1-11)
- 開催方法:オンライン開催
- テーマ:グリーン・リカバリーの視点から大阪・関西の「食文化」をリ・デザインする  
～大阪の「食文化」を世界に発信する「志し高き人材を大阪に集積させる」方程式を解く～
- 実施内容

- ①開会挨拶/CITÉさろん副会長 上田 徹 氏(5分)

- ②自己紹介&話題提供(15分×3名)

- 「事業の再定義」～中小企業だからできること～

- 株式会社パピーユ 代表取締役 藤丸 智史 氏

- 日本人の厳しい五感が生み出す品質最優先の企業風土と世界最高品質のジャパニーズウイスキー

- サントリースピリッツ株式会社 名誉チーフブレンダー 輪水 精一 氏

- 食に「価値」という魂を刻む編集者の使命感

- 株式会社料理通信社 編集主幹 君島 佐和子 氏

- ③パネルディスカッション(70分)

- 主旨説明:いのち輝く未来社会のデザインこそ「食」なり

- CITÉさろん副会長 上田 徹 氏

- テーマ:大阪の「食文化」を世界に発信する「志し高き人材を大阪に集積させる」方程式を解く

- 登壇者:下記のとおり

- ・藤丸 智史 氏(株式会社パピーユ 代表取締役)

- ・輪水 精一 氏(サントリースピリッツ株式会社 名誉チーフブレンダー)

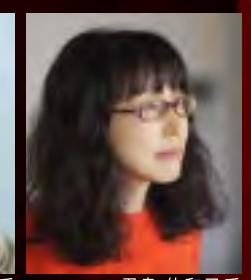
- ・君島 佐和子 氏(株式会社料理通信社 編集主幹)



藤丸 智史氏



輪水 精一氏



君島 佐和子氏

- ④会場対話(20分)

- ⑤閉会挨拶&次回予告(10分)/CITÉさろん副会長 上田 徹 氏

#### 2. 要旨報告

緊急事態宣言下と気温低下に伴う感染拡大が深刻化する中、オンライン開催となった第2回研究会では、「ヒト最重視の食の経営者」「世界最高品質の食のつくり手」「食に魂を刻して価値化する食の編集者」の3名のゲスト講師を迎え、最重要課題である志し高き人材を大阪に集積させる方法について研究しました。

##### 1)「話題提供」要旨

①伝統産業の継承／「日本人の嗜好に合うウイスキーをつくりたい」  
創業者意志の継承／伝統製法へのこだわり

②日本人の厳しい味覚と嗅覚に応える「こだわり」のものづくり

③コロナで露呈した飲食店の多くの課題:潜在的・体質的課題、有事に表面化した課題／脆弱店の都心への過剰集積

④中小企業ゆえのコロナへの迅速な対応:「事業再編」「適切箇所への人員配置」／ゼロ解雇の実現

⑤廃棄物を発生させない環境取組／教育への取組(親子体験、各種ツアーアイ、ワイン製造者の実践養成など)

##### 2)「パネルディスカッション」要旨

①大量食材・食品の都心への過剰集積に伴う大量廃棄社会の抜本改良／都市経済起点型から一次産業主導型への食材生産の早期移行

②近畿圏・関西圏で捉える新たな食文化産業圏の再構築／「食」の循環やつながりを圏域でマネジメント

③プランニングは「早期」に、取組は「長期的視点」で

④食べ物をメディア化させる意志をもつ／価値が明確化して発信力をもつ

⑤大阪の食の価値:「こだわり」「毎日食べるものの値打ちが高い」／大阪ローカルガストロノミーテーマ候補:「味覚」

⑥日本人の嗜好感性にあうものを「ぶれずに」作り続ける／「変えてはいけないもの&変える必要があるものの調和、「伝統の継承と革新」／新しいことに積極的にチャレンジできる企業風土

⑦作り手・売り手・食べ手など関わる全ての人に好影響を与え、大阪全体が良い方向に変わることを目指す社会環境づくり

⑧「作り手」は常に新たな価値を開拓し、伝える役割も担う

⑨「食べ手」の意識改革が重要な大阪／「食べ手」の教育環境の整備／意識改革は編集者の重要な役割

⑩自社事業のチェック&改善を次世代へ継承／深い感動を与えるものづくりの現場と飲食現場の更なる向上



登壇者3人を囲んで

密に配慮した運営拠点の状況

#### ■「CITÉさろん大阪食文化研究会」の底力

CITÉさろん大阪食文化研究会の企画は、アドバイザー、食創造都市・大阪推進機構事務局の大商・観光局、研究活動委員会、CITÉさろん事務局、外部委託先が一体となり、現場を見聞きし、解決すべき課題、活用していない資源、めざす方向を企画会議の場で何度も議論を重ねて発信している手づくりの研究会です。

2018年度の食動向調査では、会員企業の7鉄道事業者、ソト研、研究活動委員会、外部委託先が連携し、大阪市内13駅エリアの61飲食店、食の編集者6機関、食のイノベーター9名にヒアリングを実施しました。さらに新型コロナの大打撃を受けた2020年度には、withコロナ・ヒアリング調査として、食の編集者3機関、学識者3名、物流事業者1名、食のイノベーター6名の計13機関に、主にWEBによるヒアリングを実施しております。

このように丁寧に収集した現場の声を「楽食都市・大阪グリーンリカバリービジョン2030～未来の大坂アクションプラン～」に反映しております。



シンポジウムに向けた企画検討会議

研究活動委員・大阪メトロ堀川健氏

## まちづくりを考える、体験する、多彩なイベントを開催しています。

### CITÉトークセッション

第2回 2020年11月27日(金)18:30~20:30  
オンライン開催

今年度のCITÉトークセッションは、「アフターコロナの大坂が目指すべきもの」をテーマに実施しました。第2回は、MEZZANINE編集長の吹田良平さんに、第3回は、(一財)計量計画研究所理事の牧村和彦さんにそれぞれ講演いただきました。

**第2回:都市と人と新しい関係性論  
～大阪におけるクリエイティブ  
ネイバーフッドを探る～**

スマートシティ化の流れにより、都市にビッグデータが集まるごとに、そこから新たな産業が生まれる。また、都市がスマートになることで人間の可能性も拡張する。ここで初めて視点が人間中心に移るが、その際のキーワードが幸福だ。以上の切り口でスマートシティを見ていくことが重要だ。

かねてより我々は、労働生産性の向上が求められていた。その際の手立ては、付加価値向上策である。その市場はブルーオーシャンであることが多い。担い手は大手企業よりも個人やベンチャーの方に分がある。よって、生産性向上には「起業都市化」が必要不可欠だ。

では、起業都市化の方法とは何か。イノベーションは既存知と既存知の融合によって創発されるという。いわば、企業の枠を超えた知恵同士の接触であり、知識同士の協業だ。だとすれば、生産や創造の舞台は、オフィスではなく街中になる。都市の基本性能は、近接性・高密度・多種性・専門性・接觸機会・偶發性といえる。都市はイノベーションの培養装置と言われる所以だ。その際、都市住人が心得ておくべきマインドセットは、ソーシャルキャピタルとは別のクリエイティブキャピタルの方である。都市においては、アイディアのバーストを盛んにし、アイディアを形にすること、それが都市の宿命であり、都市ならではの可能性である。私はそれをクリエイティブネイバーフッド(創造界隈)と呼んでいる。



吹田良平氏  
MEZZANINE編集長

第3回 2020年12月14日(月)18:30~20:30  
オンライン開催

今年度のCITÉトークセッションは、「アフターコロナの大坂が目指すべきもの」をテーマに実施しました。第2回は、MEZZANINE編集長の吹田良平さんに、第3回は、(一財)計量計画研究所理事の牧村和彦さんにそれぞれ講演いただきました。

**第3回:MaaSがもたらす  
新しいモビリティ社会**

人々の生活の質の向上と継続発展に向け、都市のIoT化を進める「スマートシティ」。その中でMaaSはスマートシティにおける様々な移動手段の統合と選択を可能にし、都市の課題解決につながるシステムとして期待されています。

今回は、MaaS等スマートシティ推進の課題、社会やライフスタイルへの影響、コロナ禍による期待等について、欧米の実践例などを紹介いただきながら、お話しいただきました。

MaaSはあくまで手段の一つであるものの高齢者や移動困難者などに対する新しい移動手段をとして注目されるとともに成長戦略として交通産業に若者が魅力を感じて参入する一つの形としても期待されていること、世界では将来の自動運転社会に対するプラットフォームの競争として先行投資が行われ、スマートシティに対するモビリティ側の動きとして大きなポイントになっているとのことです。

また、日本の交通サービスには沿線開発的なモデルがあり、交通の収入以外に不動産や流通、レジャーなど様々なサービスで成長してきましたが、MaaSの登場によりデジタルトランスフォーメーションの中でどういった座組で新しい価値やライフスタイルを作り出すのかが重要であり、元々交通事業者が持っているこうしたサービス連携を強みとして生かすことが重要、と話されました。



牧村和彦氏  
(一財)計量計画研究所  
理事兼企画戦略部部長

### 第1回親睦ゴルフコンペ

2021年12月5日(土)  
大阪ゴルフクラブ

コロナ禍における  
新しい形式のゴルフコンペで  
会員交流をはかることができました。

開催された大阪ゴルフクラブは昭和12年開業の名門ゴルフクラブであり、積み重ねてきた歴史を感じさせる厳かな雰囲気を持つゴルフ場でした。今回は大阪ゴルフクラブを所有しておられる南海電鉄さまおよび和田会長に大変お世話になりました。

当日は12月とは思えない好天の中、17名の方にご参加いただきました。海を望む絶景のホールでは景色を意識するあまり、多くのボールが海に吸い込まれていきました…笑



コロナウィルス感染の影響もあり、総務委員会では開催の1週間前まで開催するかどうかを検討しましたが、感染対策をきっちり講じて皆さまが安心して楽しんでいただける環境のもと開催することを決定いたしました。

また、日本の交通サービスには沿線開発的なモデルがあり、交通の収入以外に不動産や流通、レジャーなど様々なサービスで成長してきましたが、MaaSの登場によりデジタルトランスフォーメーションの中でどういった座組で新しい価値やライフスタイルを作り出すのかが重要であり、元々交通事業者が持っているこうしたサービス連携を強みとして生かすことが重要、と話されました。

●総務委員会では毎年2回ゴルフコンペを

企画しています。



ラウンド後の参加者集合写真

## CITÉさん会員の声をお届けします。

### 新しく入会いただきました会員企業様をご紹介いたします。

#### 大阪から元気を創りつづけます！

#### 大阪市高速電気軌道株式会社

2018年4月に大阪の地下鉄民営化により誕生しました「Osaka Metro」です。弊社は第二の創業として「鉄道を核とした地下空間の価値向上、地上でのまちづくりを進める総合的な生活まちづくり企業」という企業理念のもと、新たに出発いたしました。目指す姿は「大阪から元気を創りつづける」ことであります。まさにCITÉさん会員の「大阪を元気に～まちづくりのネットワーク構築の目指して」の活動コンセプトと同じです。今後は、会員の皆様と共に、大阪の発展に微力ながら貢献できればと考えておりますので、よろしくお願ひいたします。



大阪市高速電気軌道株式会社  
執行役員  
堀川 健氏



御堂筋線



Osaka Metro 天神橋筋六丁目ビル



### CITÉさん創立30周年記念プロジェクトの進捗状況をお知らせします。

言葉や画像、目に見えない  
貴重な何かをつなげて一つにまとめる  
“紡ぐ(TSUMUGU)”場にしたい。

CITÉさんは、2022年1月で創立30周年を迎え、記念事業を行うべく検討チーム(チーム30)で打合せを進めてきましたが、ここにCITÉさん現役の若手(ヤング30)を加え、組織体制も刷新して取り組んで参ります。

開催につきましてはコロナ禍を考慮して2022年7月開催を睨み、場所も近く決定致します。事業の中身や運営の詳細につきましてはこれからですが、世の中の潮流に乗るべくオンラインやデジタル化(DX)も念頭に置き、残した言葉や画像、目に見えない貴重な何かをつなげて一つにまとめる“紡ぐ(TSUMUGU)”場にしたいとも考えています。大阪は2025年に万博が控えていますが、CITÉさんはその先へ目を向け、次の10年に向かって会員相互の共創により新しいCITÉさんの礎を築くために、何卒ご協力のほどよろしくお願いいたします。

#### CITÉさん 30周年記念事業検討ヤング30

CITÉさんは30周年記念事業検討に、これからのCITÉさんを担っていただぐる若手の方々にご参加いただきます。新たな視点での展開を期待しています。



鳴滝 翔吾氏



永田 賢司氏



平井 陽氏



仲村 侑記氏



福田 隼佑氏



遠藤 諒太氏



貝谷 力氏



山内 隆史氏



株式会社IAO竹田設計

JR西日本不動産開発  
株式会社

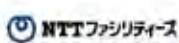
株式会社KANSCOテクノス



株式会社NTTドコモ



NTT都市開発株式会社

株式会社  
NTTファシリティーズ

株式会社アーキエムズ



99大阪ガス



大阪ガス株式会社



大阪市高速電気軌道株式会社



株式会社大林組



株式会社奥村組



オリックス不動産株式会社



鹿島建設株式会社

関西電力

関西電力株式会社



KEIHAN

京阪ホールディングス  
株式会社

Member's List 会員リスト

計50社(50会員)



Kinden

株式会社きんでん

近畿不動産株式会社



株式会社クボタ

DAIMON

京阪ホールディングス  
株式会社

KONOIKE

KOKUYO



株式会社サイマックス関西

サントリー  
コーポレートビジネス  
株式会社

清水建設株式会社

住友商事

住友商事株式会社

住友電設

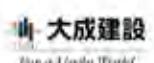
住友電設株式会社



積水ハウス株式会社



ダイキン工業株式会社



For a Greener World



大成建設株式会社

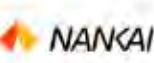
株式会社竹中工務店

中央建設コンサルタント  
株式会社

東京建物株式会社



阪急建設株式会社



南海電気鉄道株式会社

西日本電信電話  
株式会社JR西日本  
西日本旅客鉄道  
株式会社

株式会社日建設計



日本生命保険相互会社



株式会社日本設計



パナソニック株式会社



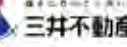
阪急電鉄株式会社

阪急阪神不動産  
株式会社

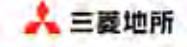
阪神電氣株式会社



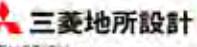
富士通株式会社



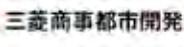
三井不動産株式会社



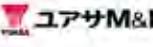
三菱地所株式会社



株式会社三菱地所設計



三菱商事都市開発



ユアサM&amp;B

## Event Calender

2020年度-2021年度 CITEさんる イベント・カレンダー

## ◎2020年度

11/27 金 18:30	◆第2回 CITEトークセッション	広報	オンライン開催
12/ 3 木 14:00	◆12月 定例幹事会	総務	オンライン開催
15:00	◆第1回 大阪食文化研究会	研究活動	
12/ 8 火 16:30	◆常任幹事会	総務	オンライン開催
12/14 月 18:30	◆第3回 CITEトークセッション	広報	オンライン開催
12/17 木 15:00	◆2020-2021年度 WS3(第2回)	分科会	オンライン開催
12/21 月 15:00	◆2020-2021年度 WS1(第2回)	分科会	オンライン開催
1/15 金 15:00	◆2020-2021年度 WS2(第2回)	分科会	オンライン開催
1/26 火 15:00	◆第2回 大阪食文化研究会	研究活動	オンライン開催
2/ 4 木 15:00	◆第14回 CITEまちづくりシンポジウム	広報	オンライン開催
2/15 月 13:00	◆ソトから見た大阪研究会「シェア街ヒアリング」	分科会	オンライン開催
14:50	◆トピックスさんる	総務	
15:20	◆2月 定例幹事会	総務	
16:30	◆第2回 さんるトーク	研究活動	
2/17 水 16:00	◆第4期 大阪都市格研究会 第2回 研究会	分科会	オンライン開催
3/ 5 月 15:00	◆2020-2021年度 WS3(第3回)	分科会	オンライン開催
3/11 木 15:00	◆2020-2021年度 WS2(第3回)	分科会	オンライン開催
3/12 金 15:00	◆2020-2021年度 WS1(第3回)	分科会	オンライン開催
3/17 水 15:30	◆常任幹事会	総務	(株)大阪市開発公社 区分所有者会会議室
3/30 火 15:00	◆大阪食文化研究会 ファイナルシンポジウム	研究活動	大阪俱楽部

## ◎2021年度

4/20 火 15:00	◆4月 定例幹事会	総務	伊藤祐クリエイトセンター
--------------	-----------	----	--------------

■ホームページを開設しています!

<http://www.citesalon.jp/>

(一部会員専用ページがあります)



## 編集後記

コロナ、オンライン、リモート・在宅、新しい生活様式、リモート飲み会等々、今までとは異なる生活がドンドン進み、マスク生活も日常となりました。1か月遅れの前号発行以来、わずか4か月ですが、カレンダーをご覧になっていただいたらお判りになるように、ほぼオンライン開催が当たり前になっています。世に先んじたテーマで研究会等を開き、そのあとに、講師も交え、言い足らないところ、お聞きできなかった点など、喧々諤々議論していただく場がないのは寂しい限りです。前回も後記で記しましたが、改めて、CITEさんの活動の柱である交流会の意義を感じています。

2021年度総会は、第30回となり、30周年記念事業も、2021年度から次年度にかけて展開されます。CITEさんが、会員の皆様の支えで、次の10年、20年に向け、着実に発展していくことを切に願っています。(事務局)

責任編集提供: 株式会社竹中工務店

シテ・レトル  
2021年3月号 Vol.83

発行/CITEさんる事務局  
〒541-0055 大阪市中央区船場中央2-2-2  
船場センタービル5号館2階  
一般財団法人 都市技術センター 内  
企画/CITEさんる企画委員会  
編集/Alemvis